

# 小学校 国語科部会

部会長名 糸田町立糸田小学校 校長 藤田 昭介

実践者名 福智町立市場小学校 教諭 西村 奏音

## 1 研究主題

多様な問いを比較・選択する学習を通して主体的に読みを深める

第6学年国語科学習指導

～問い選び、読み合い、評価の活動に着目して～

## 2 主題設定の理由

### (1) 現代社会の要請から

現代社会では、様々な文字情報があふれ、児童は情報を主体的に捉え、必要な情報を取捨選択し、読み解く力が求められている。このような状況の中、次期学習指導要領にむけた「論点整理」(令和7年)では、言語応力の育成において「問いをもつこと」「問いを手がかりに読み解くこと」「多様な見方・考え方を比較しながら思考を深めること」が重要な観点として挙げられている。これらに共通して示唆されていることは、児童の問いを学びの核として、学習に取り組むことである。しかし、現代社会においては、SNS等での短文でのやり取りに慣れ、一つの言葉に立ち止まって言葉を問うたり、言葉によって思考を深めたりする経験が不足していると考えられる。したがって、国語科教育においても、自ら問いをもち、その問いを比較・選択しながら読みを深める学習の必要性が求められていると考える。以上のことから、本研究で多様な問いを比較・選択し、主体的に読みを深める力を育てることは現代社会の要請に合致するため、意義深い研究であると考えられる。

### (2) 児童の実態から

本学級の児童は、六年生の説明的文章「時計の時間と心の時間」において、主張と事例の関係をとらえ、自分の考えを伝え合う学習を行ってきた。しかし、形式や書きぶり、論の進め方等に問いをもち、読みを深めることに不十分さがあったと考える。これらの実態の原因として、児童が自ら見出した問いではなく、教師が設定した形式的な問いでの学習を進めている点。また問いの質や幅が限定的で、児童が多様な問いをもつことができていなかったことが原因として考えられる。

そこで、本研究で目指す「多様な問いを比較・選択し、主体的に読みを深める力」を育成することは、上記のような児童の課題を解決することができると思う。したがって本研究は大変意義深いと思う。

## 3 主題の意味

### (1) 「多様な問いを比較・選択する」とは

「多様な」とは、いろいろ異なるさま、異なるものの多いさまという意味である。

「問い」とは、文章を読み、子ども同士の考えのずれから生まれた「なぜだろう、解決したいな。」という読みの課題のことである。それは言葉の意味についての問いから筆者の論についての問いまで多様なものであり、読みを深めたり、自己の考えを構築したりするための思考の出発点として機能するものと位置づけられる。

したがって、本研究における「多様な問いを比較・選択する」とは、児童が思考の出発点となる様々な読みの課題に出合い、出し合い、それぞれの違いを吟味した上で、自分の考えを深めることができる問いを選ぶことである。

## (2) 「主体的に読みを深める」とは

「主体的」とは、児童が学習の内容や方法にどんな意味があるか、どんな良さがあるのかを自分なりに見だし、次の学習につなげようとしている状態と考える。

「読みを深める」とは、「言葉による見方・考え方」を働かせて文章の論理や表現の意図を考え、他の視点と比較することで、自己の解釈を深めることである。

したがって、本研究における「主体的に読みを深める」とは児童が、言葉による見方・考え方を働かせて文章の論理や表現の意図を捉え、他者や多様な視点と比較しながら自己の解釈を更新していく過程において、その学びの価値や意義を自ら見だし、次の学習へとつなげようとしている状態と定義する。

中央教育審議会答申(2016.12.21)では、『「学びに向かう力・人間性等」で挙げられている態度等が基盤となって、自ら次の学習活動に向かおうとする意識が生まれ、「知識・技能」や「思考力・判断力・表現力等」の育成が図られる。』と示されている。このことから、児童が主体的に教材等に向かうことが重要であると考えられる。

本研究における多様な問いを比較・選択し、主体的に読みを深めた児童の具体的な姿を以下のようにとらえる。

- ① 主体的に問いについて考え、根拠をもって問いを選ぶことができる児童
- ② 多様な視点から問いを考え、学習内容と方法について振り返ることができる児童

## (3) 「問い選び、読み合い、評価の活動」とは

「問い選び」の活動とは教材文を読んだ際に児童が抱く「なぜだろう」「どうすればいいのだろう」といった素朴な疑問(問い)の中から、単元の中で解決すべきものを児童同士の話し合いによって決定する活動である。

「読み合い」の活動とは、「問い選び」で選定された問いについて話し合い、児童同士で交流することで、教材に対する解釈を深めていく活動である。その際の方法や形態、場所なども児童が考えられる活動である。

「評価」の活動とは、読み合いの活動で扱った問いなどを振り返り、「自分の読みがどのように変化したか」や「学習方法が適切であったか」、「言語活動に向かったか」などを児童自身が考える活動である。

#### 4 研究の目標

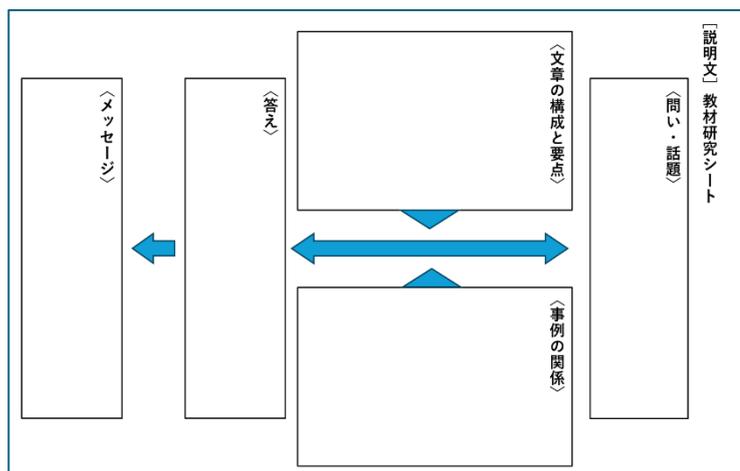
国語科の学習において、自ら読みを深め、自分の考えを主体的に形成する力を育むための問い選び、読み合いの活動の在り方を究明する。

#### 5 研究仮説

国語科の学習において、教材の特性を踏まえて多様な問いを提示・共有し、児童自身が学習の見通しをもって問いを比較・選択する活動を位置付けることで、児童は自らの課題意識を明確にし、主体的に読みを深めていくようになるであろう。

**着眼1** 「教材研究シート」と「10の問い」によって見出した教材の特性を生かす言語活動の設定

教材研究は教材（ことば）の分析を通して、教材の特性をとらえ、先生が教えたことを児童が学びたいことに変えていく作業のことである。教材研究の過程は①教材（ことば）の分析、②教材化である。教材の分析の際に「教材研究シート」【資料1】を活用し、基本的な構造をとらえるようにする。そして、物語のフレームをもとに、教材の特性をより鮮明にとらえるために「10の問い」【資料2】を用いて、さらに教材分析を行う。そこで見出した教材の特性と児童の実態を基に、言語活動を設定する。



資料1 教材研究シート

- (1) 題名を問いの文にすると？
- (2) 説明文のジャンル(実証型、ルポ型、論説型など)は？
- (3) 絵、図、動作で表すと？
- (4) くり返されているのは？
- (5) 接続語や強調・文末表現の効果は？
- (6) 図、表、グラフの効果は？
- (7) 視点を変えて見ると？
- (8) 反証できる事実はない？
- (9) 説明にズレや飛躍はない？

資料2 教材分析の「10」の問い

**着眼2** 自ら学びを選択・決定する単元構想

本研究では、学習に入る前に教材や言語活動との出合わせ方を工夫する。そうすることで児童の「なぜだろう。」「やってみたい。」という知的好奇心を喚起することができる。その後、その言語活動を達成するためにどうすればよいか児童一人一人が考える中で、一時間の問いを選択し、決定する学習計画を児童と共有しながら作っていくようにする。また、単元を貫く言語活動を考える際、児童が主体となって選択・決定するようにして実践を行っていく。

**着眼3** 「問い選び、読み合い、評価の活動」を中心とした授業の工夫

本研究では、児童が主体となって「問い選び、読み合い、評価の活動」を行えるようにしていく。その際、「問い」を考える際に、初発の感想からだけでなく、言語活動にむけての不安点を基にする。また、読み合いの際には児童が学習方法を選択できるようにする。具体は指導の実地で述べる。さらに、「読み合いの活動」で学習が深まったかを評価し、それを活かして次回以降の学習計画を児童が主体となって考えるサイクルを行う。

## 6 研究の計画（授業の計画）

### （1） 単元「筆者の工夫をとらえて読み、それをいかして書こう（「鳥獣戯画」を読む）」

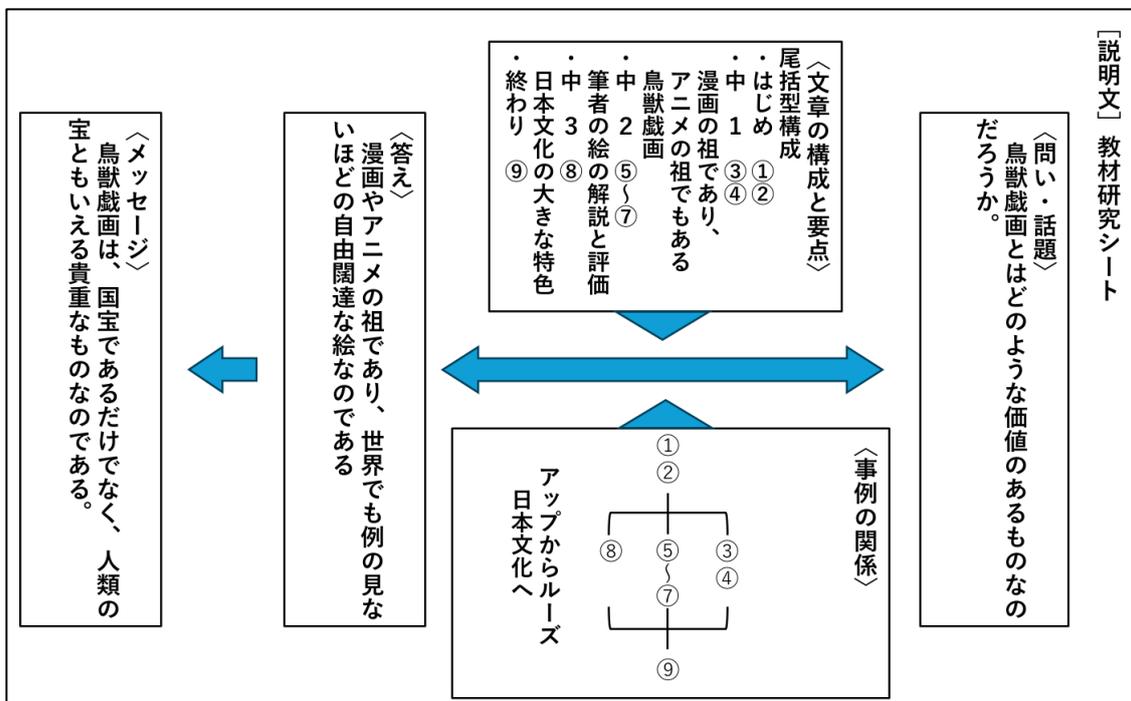
光村図書

### （2） 単元の目標及び指導計画

単元	筆者の工夫をとらえて読み、それをいかして書こう	総時間	11 時間	時期	9 月
単元の目標	<p>○比喩や反復などの表現の工夫に気付くことができる。 (知識および技能)</p> <p>○目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つけた り、論の進め方について考えたりすることができる。 (思考力、判断力、表現力)</p> <p>○粘り強く論の進め方について考えたり、書き表し方を工夫したりし、学習の 見通しをもって日本文化のよさを伝える文章を書こうとしている。 (学びに向かう力、人間性)</p>				
次	時	学習活動	評価基準と評価方法		
1	1	教師作成の落語のよさが伝わる文章を基に単元のゴールへの見通しをもち、学習計画を立てる。	【主】単元のゴールへの見通しをもち、意欲的に紹介したい日本文化を選んで調べている。(観察)		
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <b>単元を貫く言語活動</b> 筆者の工夫をとらえて読み、それをいかして書こう         </div>					
2	2	説明的文章の読み方のポイントを確認し、「鳥獣戯画を読む」に書き込む	【思】事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に捉えることができる。(記述、発言)		
	3		【主】問いを主体的に考え、課題意識をもっている。(記述、発言)		
	4	「鳥獣戯画を読む」で問い作り①	【思】筆者の論の進め方について考えることができる。(記述・発言)		
	5	「鳥獣戯画を読む」で読みあい①	【思】前時の問いを視点を基に評価し、自分の読みを深めるための問いを選ぶことができる。(記述、発言)		
6	「鳥獣戯画を読む」で評価①&問い作り②				

	7	「鳥獣戯画を読む」で読みあい②&評価	【主】主体的に読み合い、自分の意見を表現している。(記述、発言)
3	8	日本文化を紹介する文章を書く	【思】筆者の論の進め方の工夫を基に、日本文化を紹介する文章を書いている。(記述)
	9		
	10		
	11	単元の振り返り	【主】文章を読み合い、文章の工夫を見つけ合うことができる。(記述、発言)

(3) 【着眼1】「教材研究シート」と「10の問い」による教材の特性を見出す教材研究  
教材の基本的な構造を明らかにするために、「教材研究シート」を用いて、以下のように教材  
分析を行った。【資料3】



【資料3】 『鳥獣戯画』を読むの教材研究シート

教材の基本的な構造をとらえたのちに、上記の「10の問い」を用いて、教材の特性を以下のように分析した

ア 「鳥獣戯画」を『読む』という題名  
本教材の中心となる「鳥獣戯画」は歴史の教科書にも載っている国宝の絵巻物である。その「鳥獣戯画」を「見る」ではなく「読む」と表現することで、読み手に疑問を持たせることができる。「読む」には様々な意味があり、絵の中の物語を読む、絵の背景にある歴史などを読むなどが考えられ、読み手の捉え方を多方に広げていくことができる。

このように、題名に「読む」という表現が用いられていることは、読み手に対して多様な読み方を想起させ、何をどのように読めばよいのかという問いを生み出す教材であると言える。したがって、本教材は、児童が自ら問いを立て、その問いを比較・選択しながら読みを深めていく学習に適している。

#### イ 巧みな表現、細かな絵の解説

一つの文章が常体で短く分かりやすい。文末表現に体言止めが使われている。「めくってごらん。」「どうだい。」「わかるね。」という語り口調が多く使われている。これらにより、筆者から絵の解説を受けているように感じられる。このことにより、「鳥獣戯画」について興味をもち、「巻物の絵を見てみたい。」や「自分の思いを解説したい」という思いを読み手に持たせることができる。

これらの表現上の工夫は、読み手に一方向的な理解を促すのではなく、「なぜこのように書いているのか」「この表現にはどのような意図があるのか」といった問いを生じさせる。児童が自ら問いをもつことを通して、主体的に読みを深めることができる教材である。

#### ウ 八段落での視点の転換

本文は九段落で構成される尾括型の評論文である。その中で問いと答えがはっきりしていない。三、四段落では「鳥獣戯画」を漫画の祖、アニメの祖であるとアニメーション監督である筆者が概観し、五、六、七段落では吹き出し、動きや表情、時間の流れを詳しく解説する。その後、八段落で「鳥獣戯画」から日本文化へと視点を転換する。そのことで、「鳥獣戯画」が絵で表す日本文化の源流であるという主張につながる。このことで「鳥獣戯画」を通して日本文化の歴史を「読む」ことにつながる。

視点が段落ごとに転換する構成は、読み手に対して文章全体の構成や論の進め方に目を向けさせる。そのため、「この段落は必要なのか」「なぜこの順で書かれているのか」といった構成に関わる問いが生まれやすく、問いを比較・選択しながら読みを深める学習につながる。

## 7 指導の実際

### (1)単元の導入段階

#### 【着眼2】自ら学びを選択・決定する単元構想

ここでは、単元全体に関わる言語活動をどのように設定し、学習計画を作成したかを述べる。

本教材を学習する直前に社会科で昔の日本の文化について学習をしていた。その中で日本の文化について深く知りたいと考えている児童が多く、本文を読むことで児童の興味関心を引くと考えた。また、教材研究の結果から、筆者の書き方の工夫に着目すると考え、児童の意欲を喚起できると考えた。そこで、「日本文化を紹介する」という言語活動を設定した。しかし、本教材は評論文であり、児童がこれまであまり目にしていないとも考え、初読の感想を「筆者の主張に納得できるか」、「筆者に聞いてみたいことはないか」という視点を基に考え、交流した。児童の感想は以下のものであった。

- ・ どうして言葉が難しいのか
- ・ どうしてこのような書き方(呼びかけるような)をしているのか

- ・鳥獣戯画は人類の宝と言えるのか
- ・鳥獣戯画が今もまだ伝えられているのはなぜか
- ・「ええい！」のところについてもっと知りたい
- ・1段落の書き方について
- ・「国宝である～宝なのだ」なぜそのように思うのか
- ・「国宝である～宝なのだ」なぜこのことを伝えたいのか

上記のように、筆者の主張に納得できない児童も数名いたことから、児童同士でズレが生じた。また、自分はどのように書くかという視点で感想を書いている児童もいたことから、児童の意欲を喚起できたと考えられる。

## (2)単元の展開段階

これまでの学習を生かして筆者に尋ねたいことを考えると、鳥獣戯画について興味を持つことはできたが、あまり学習をしていない評論文であることから書きぶりや表現法について難しさを感じている様子が見られた。そこで、これまで学習してきた説明文と評論文の違いや筆者がアニメーション監督であることを教えた。その後、「どんなことを解決すれば日本文化に興味を持ってもらえる文章が書けるだろう。」と問いかけ、解決したい問いについて話し合った。そこで出た問いは以下のものであった。

- ・最初の「はっけよーい、のこった」は必要なのか
- ・7段落の「それぞれが～考える番だ。」にはどういう意味があるのか
- ・「国宝である～宝なのだ」なぜそのように思うのか
- ・「国宝である～宝なのだ」なぜこのことを伝えたいのか
- ・「祖先たちは～伝えてくれた。」なぜそこまでして絵巻物を守るのか
- ・1段落を書いたのはなぜか(物語文のように感じる)
- ・始めに話題提示や問いがないのはなぜか
- ・「人類の宝なのだ」と決めつけているのはなぜか
- ・「アニメの祖」と本当に言えるのか

これらの問いを比較する中で、児童は「どの問いを解決すれば、読み手に興味を持ってもらえる文章にできるか」という視点で話し合った。その結果、1段落の役割に着目する問いが選択された。これは、児童が学習の目的を意識し、自らの読みを深めるために問いを選択した姿であり、主体的に学習に向かっている様子と捉えることができる。

これらの問いを基に児童一人一人がどの問いを解決したいか話し合った。(問い選びの活動①)その結果、読み手に興味を持ってもらえるような文章を書きたいという児童の願いから「1段落は必要なのか」という問いが選ばれ、みんなで読み合い①を行うことになった。

読み合いの際には、児童が自分で学びの形態を選択できるように、本文の全文が書かれている全文シートをプリントに印刷したものとロイロノート上でも同じものを配付した。読み合い①では、1段落が必要だと感じる児童は18名、必要ではないと感じる児童は5名であった。理由は以下のものであった。

○必要

- ・物語風にすることでどのような話なのか気になる
- ・いきなり鳥獣戯画の説明をすると分かりにくいから
- ・鳥獣戯画のことが分かるから
- ・文章を面白いと感じて記憶に残りやすいと思うから
- ・蛙と兎が何をしているかわかるから
- ・初めて鳥獣戯画を知る人にも文章が分かると思ったから
- ・筆と墨だけで書いていることから興味を引くことができると思うから

○必要ではない

- ・一段落がなくても鳥獣戯画について説明する文章が成り立つから
- ・ナレーション風に書かれていることで難しそうと感じるから

これらの答えを基に問いの評価①を行った。その中で、「同じようなことを考えていてわからなくなった。」「一段落について分かったけれど、他の場所に入れても良いのではないかと思った。」「ほかの問いについても考えてみたい」のように問い①について評価する中でさらに問いがうまれた。授業が終わる際には、「次の国語はいつですか。」や「休み時間に友達と話してよいですか。」のように自分が気になる問いについて考えることで国語科に対する意欲が高まった姿が見られた。

その後、問い選び②を行う際にどのような問いがあるかを交流した。その際に出てきた問いは以下のものである。

- ・「それぞれが考える番だ。」どのような意図があるのか(読み手に問いかけているのはなぜか)
- ・蛙の口から何が出ているのか
- ・一段落を七段落の前に入れても良いのではないか
- ・説明的文章の中に物語のような文章があって良いのか
- ・はじめがはっきりしない(話題提示がない)のはなぜか
- ・尾括型なのか双括型なのか
- ・筆者が二段落と六段落を入れた理由

### (3) 検証授業

第2次の6時目を本研究の検証授業とし、着眼に沿って指導計画を作成した。以下のような計画で授業を行った。

- 1 主 眼 前時の問いによって自分の文章をより魅力的なものにすることができるか考え、さらに魅力的にするために解決する問いを視点を基に考えることができる。
- 2 授業仮説 展開段階で問い選びの活動を行う中で「自分の文章をもっとよくするためにはどの問いが良いか。」を問うことで問い選びの視点に着目することができるだろう。

	学習活動	○主な発問や指示 ・予想される児童の反応	・指導上の留意点 ◆評価規準
--	------	-------------------------	-------------------

導入 10分	1 前時までを振り返り、問いについての評価を行う。	○前回の読み合いをもとに魅力的な文章を書くことができるか ・読み手に面白さを感じさせることができない	・問いの評価を行うために、前時までの板書やわかったことを再確認する場を設定する。
めあて 日本文化を分かりやすく伝えることができる問いを選ぼう。			
展開 30分	2 解決したいことやわからないことを考える。  3 どの問いを解決するかを決定する。	○問い選び②で出た問いを確認する ・題名の読むとはどういうこと ・動きがあるとはどういうことかな ・なんで火災から助けたの ○どの問いを解決すれば自分の文章を魅力的にできるか ・文章構成について考えるとよいと思う ・筆者の工夫を見つけられる問いが良いと思う。	・自分の考えを明確にするために全文シートを活用する。 ・児童の話し合いを活性化させるために、児童同士をつなぐ声掛けを行う。 ・問いの視点を示すために、問いの種類シートを提示する。 ◆自分の読みを深めるための問いを問いの視点を基に選ぶことができる。(思考・判断・表現)(記述、発言)
終末 5分	4 本時の振り返りを行う。	○本時の学習の振り返りと次時の見直しを書く	・振り返りを共有するためにロイロノートで振り返りを行う。

ここでは、検証授業における教師の働きかけと児童の反応を抜粋して示す。【資料4】

教師の働きかけ	児童の反応
(前時までの振り返りをした後) ・これまで問い選び、読み合いをしてきましたが、もう日本文化を魅力的に伝える文章を書くことはできそうですか。	(自分の書いた文章を交流する) ・書くことはできたけれど、面白みがないように感じる。 ・読み手にどのように呼びかければよいかわからない。

<p>・前時で出ていた問いを「この問いが解決するとどんなことが分かるか」という視点で分類してみましょう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本文の内容が詳しく分かる問い</li> <li>・文章構成について分かる問い</li> <li>・筆者の主張について分かる問い</li> <li>・筆者の工夫について分かる問い</li> </ul>
--	---

【資料4】 検証授業における教師の働きかけと児童の反応(抜粋)

上記のように問いによってわかることを考えることで問い選びの視点をもたせることができ、問い選び②を根拠を基に行うことができた。また、学習の形態を児童に委ねることで、一人で考える児童やタブレットを使って考える児童、黒板に考えを書く児童など、多様な学習方法を選択することで、活発な話し合いを行うことができた。【資料5】



【資料5】 問い選び②の様子

しかし、学習の最後に書かせた振り返りでは、「蛙と兎から何が出ているのだろう」、「鳥獣戯画の甲巻を選んだのはなぜか」のように本文では解決できないものについて考えたいと考える児童が数名いた。児童の問い選び②で選ばれた問いは「『鳥獣戯画』を読むは本当に尾括型なのか。(双括型ではないのか)」であった。一度は納得した問いについてもさらにみんなで話し合いたいと問い選び②を行ううちに児童自身が考えた結果であると考えられる。

検証授業後には読み合い②と問い②に対する評価②を行った。読み合い②でも、【資料5】のように黒板に書き込んだり、教室で話し合ったり、図書室でほかの説明的文章を読んで本文と比較したりする姿が見られた。授業後の振り返りを見ると、「友達と話すことで自分の考えが整理できて新しい考えを見つけることができた。」や「図書室でほかの文章と比べると評論文の特徴が分かりやすかったです。」のような記述が見られた。学習方法や形態を選択することで、児童が主体的に学習に取り組んだことが考えられる。

評価②では「ほかの説明文と比較して考えると『鳥獣戯画』を読むは評論文だとよく分かりました。これからも本文だけでなく、色んな説明文を見ようと思います。」や「みんなと黒板に書き込むことで、今まで考えていないところが分かりました。」、「答えをはっきりしないところもあったけれど、筆者の作品をみて筆者のことを知ると考えやすかった」など、問いについて考える過程で本文だけでなく、他の説明的文章と比較することや筆者について調べるなどの学習方法について考えることもできた児童がいた。

#### (4)単元の終末段階

単元の終末では、学習した筆者の工夫を生かして日本文化を紹介する文章を書く活動を設定した。日本文化については社会科の学習やインターネット、学校図書館などを活用し、情報を収集させた。文章を書く際に『鳥獣戯画』を読むの工夫をいかして書こうとする姿が見られたが、書いてみるとうまく書けないと感じる児童が多数いたことから、本文と自分の文章を往還する活動が必要であったと考える。単元導入の際に日本文化を紹介する文章を書いておいて、不十分さをもたせて単元に入り、児童の考えを明確にするなどの工夫が必要であった。

### 8 研究のまとめ

本研究で取り組んだ「問い選び、読み合い、評価の活動」の活動は多様な問いを比較・選択し、主体的に読みを深める力を育むうえで有効であったと考える。児童が主体となって問い選びを行うことで「何を解決したいのか」「どのように活かされるのか」を意識することができた。また、問い選び・読み合いの活動の後に評価の活動を設定することで、学習形態を指定しないことで学習内容だけでなく、学習方法についても考えることができた。以上の実践から、児童は多様な問いを比較する中で、学習の目的に照らして問いを選択し、その問いを手がかりに読みを深めていく姿を見せた。このことから、問い選び・読み合い・評価の活動を位置付けることで、児童が主体的に読みを深めることができるという本研究の仮説は、一定程度妥当であると考えられる。

しかし、一部の児童のみの発言で評価の活動が進んだり、学習グループが固定されてしまい、それぞれの意見を交流しなかつたりするなどがあった。これは、読み合いの時間を十分に確保できず、自分の考えに自信をもてないことや、自分の考えたい問いに集中してしまい、他の問いに興味をもてないことなどが原因であると考えられる。今後の実践では、読み合いの時間の確保のための授業計画や交流するための方法を考えて実践に臨む。

本研究では、多様な問いを比較・選択する学習を位置付けることで、児童が主体的に読みを深めていく姿を捉えることを目的として、第6学年国語科において実践を行った。その結果、本単元においては、問いを比較し、学習の目的に照らして選択する活動を通して、児童が自らの読みを問い直し、考えを深めていく姿が見られた。このことから、問い選び・読み合い・評価の活動を位置付けることは、児童が主体的に読みを深める上で有効である可能性が示唆された。

本実践を通して、児童は教師から与えられた問いに答えるだけでなく、自ら問いを比較・選択し、その問いを手がかりに読みを進めていくようになった。これは、問いをどのように扱うかという学習過程に着目した指導が、児童の主体的に読みを深める姿につながったことを示していると考えられる。ただし、これは本単元における実践の結果であり、今後も継続的な検討が必要である。

### 9 成果と課題

#### (1) 着眼1 「教材研究シート」と「10の問い」によって見出した教材の特性を生かす言語活動の設定

- 「教材研究シート」を基に物語の基本的な構造を把握し、「10の問い」で教材の特性を見出すことで、教師が物語を教材化することができた。

- より深い教材研究をし、児童がどのような点に問いをもつかを明確にしておく必要がある。
- (2) 自ら学びを選択・決定する単元構想
  - 児童が自ら学びを選択・決定することで児童が主体的に学習に取り組み、多様な学習を行うことができた。
  - 一部の児童の発言で学習が進んでしまったり、グループが固定化されたりするので、全体で対話を生み出す支援の工夫が必要である。
- (3) 「問い選び、読み合い、評価の活動」を中心とした授業の工夫
  - 問い選びを児童主体で行うことで、児童の意欲を喚起することにつながった。
  - 読み合いの後に問いと読み合いについて評価することで、学習内容だけでなく、学習方法についても振り返ることができた。
  - 多様な学習方法に児童が気づき、その後の実践でも児童が主体となって活動する様子が見られた。
  - それぞれの活動に時間がかかってしまうため、綿密な学習計画が必要がある。
  - 問い選びの活動において、問いの比較・選択が形式的になってしまう場面も見られた。今後は、問いを選ぶ視点をより明確に示す手立てや、評価活動の在り方について検討していく必要がある。
  - 評価の活動において教師の意図する学習内容や児童の学びを価値づけする必要があり、教師の見取りが重要である。

◎ 参考文献

- 香月正登『教材研究シートの活用』、東洋館出版、2013年
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 国語編』、東洋館出版、2019年